由良神社の隠れ狛犬
―考古学からの視点

由良神社の拝殿の前には一対の狛犬がいますが、本殿の前にもひっそりと一対の狛犬が佇んでいます。

今回は本殿前の狛犬を様々な角度から撮影し、写真をパソコンで解析して三次元モデルを作る「フォトグラメトリー」という方法を用いて、3D モデルを作成しました。3D モデルを作成することで全体のプロポーションや、正面から見ることのできない尾などの部分もしっかり観察できるようになりました。

この狛犬のはっきりとした年代はわかりませんが、扁平な頭とがっしりとした体躯は、丹後地域の古い狛犬に共通する要素を多く含みます。台座と一体になった形から、それらの要素を受け継いだ近世のものと思われます。阿吽の二つを比較すると、セットの狛犬でも細部の意匠が微妙に異なることがわかります。宮津市の和貴宮神社にある享保 3 年（1718）の狛犬と同時期のものである可能性も考えられ、いずれにせよ由良神社に残る中でも古いものの一つであることがわかりました。

由良神社境内には石燈籠などの石造物が点在し、神社に寄せられた人々の思いを感じ取ることができます。加えて、正確な測量図を作ることができれば、他のものと比較しやすくなり、もの言わぬ石造物も神社の歴史を紐解く鍵になるのです。

▲本殿前の狛犬

▲狛犬の三次元データ

▲由良での調査風景（上段左から古文書調査、蔵から古文書を搬出、石灯籠測量。下段左から狛犬の撮影、丹後鉄道にて由良への道中、花御所八幡に由来する本殿前虹梁の鳩の彫刻）

京都府立大学・文化遺産学コース
ACTR 成果報告

発行：令和３年（2021)12 月５日
執筆：上田亜実、正瑞千幸、長谷川巴南（編集）、守田悠
監修：岸泰子（代表）、菱田哲郎 、東昇
（京都府立大学文学部歴史学科）

由良神社と由良艦

京都府立大学・文学部歴史学科文化遺産学コースでは 2020 年 10 月から、宮津市由良地域でのフィールド調査を行ってきました。

歴史学と一口に言ってみても、その調査へのアプローチは様々です。今回は歴史学・建築史学・考古学の各分野から由良に残る文化遺産を題材に調査を行いました。

その成果をご紹介していきます。

巻頭コラム

知ってる？練習艦「由良川」

軍艦由良のことは知っていても、「由良川」という練習艦のことは知らない方もいらっしゃるのではないでしょうか？「由良川」とは、「海軍機関学校練習艦由良川」のことです。

海軍機関学校とは、旧日本海軍の将校等の教育を目的とした学校であり、大正 14 年（1925）に横須賀から舞鶴へ移転しました。練習艦由良川は、その海軍機関学校で使用された遠洋航海用の艦艇です。

その練習艦由良川の守護神が由良神社であったことが、今回の調査で発見した新聞記事の切り抜きから判明しました。

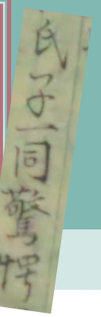
由良神社は、軍艦由良のみでなく、近辺で訓練に使用していた練習艦由良川とも密接な関係があったのですね。

近代の由良神社と軍艦由良
―歴史学からの視点

近代の由良神社の歴史は、神社の「昇格」の歴史とも言えます。社格制度は昭和 21 年（1946）に廃止されますが、由良神社は「無格」から京都府が認める「府社」まで昇格を果たします。その怒涛の昇格の裏側には、軍艦由良も深く関わっていました。史料とともに、その内容を確認していきましょう！

由良神社 府社への歩み

明治 15 年（1882）
豊岡県の官簿にて「熊野神社ハ、奈具社境内無格社」の記述。
→「氏子一同驚愕」



明治 19 年
村社昇格。

明治 21 年
花御所八幡と合併し、「由良神社」に改称する。

大正 6 年（1917）
遷座。拝殿新築。

大正 12 年
軍艦由良竣工。
→軍艦祭りを開催。

昭和 3 年（1928）
郷社昇格。

昭和 11 年
落雷。翌 12 年には境内改築。一部新築。

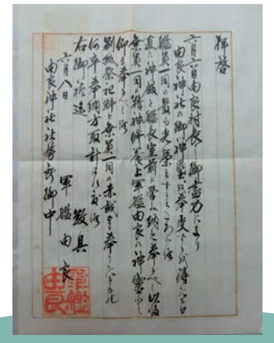
昭和 17 年
府社昇格。

明治維新後、熊野神社（由良神社の前身）の氏子であった人々は、式内社・郷社の大川神社（舞鶴市）の氏子となりました。しかし、明治 15 年に熊野神社が「奈具神社内の無格社」として登記されていたことが発覚すると、氏子一同は驚き、熊野神社氏子への復帰を誓い、熊野神社の「村社」への昇格を数度歎願します。そして明治 19 年には村社に昇格するのです。その後明治 21 年には、熊野神社は花御所八幡（京都市）と合併し、「由良神社」に改称します。

村社昇格は、由良神社氏子の団結力が高まる契機になったことが伺えます。

高まる昇格願望

由良神社と軍艦由良の関係性



▲〔書状〕（大正 12 年）
軍艦由良乗員が神社に祭祀料を奉納している。

由良神社が艦長の懇請を受けて艦内社となったのは、大正 12 年 5 月です。以降、軍艦由良から武運長久を祈るための祭祀料や奄美大島産蘇鉄が奉納されたり、全乗員約 500 名が参拝に訪れたりと、軍艦由良の乗員から厚い崇敬を集めました。

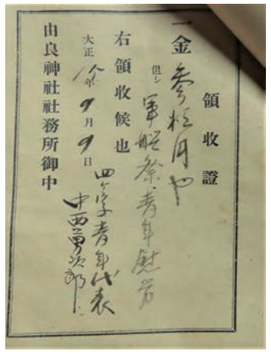
艦内社になったことは由良神社にとっても大きな転換点となりました。昭和 17 年 9 月 9 日に府社への昇格を遂げた由良神社の歴史を記す「由緒書」には、軍艦由良との関係が述べられています。また、軍艦由良の艦長・海軍大佐豊田副武による昇格請願も行われており、軍艦由良の艦内社であるという事実が府社昇格に貢献したと考えられます。軍艦由良は由良神社に守護されるのみではなく、由良神社の発展にも寄与したのです。

▼由良神社内に保管されていた文書群。ひとつひとつの箱を見てじっくり調査を行います。

軍艦由良との関係性は由良神社のみに留まるものでなく、地域をも巻き込んだものでした。その一例が軍艦祭の開催です。今回、大正 15 年 9 月に軍艦祭が行われた際の領収証が発見されました。また、軍艦由良乗員からの玉串料 50 円が積立金の一部に充てられていたことも分かりました。

軍艦由良によって神社や地域が盛り上がる当時の様子は、様々な祭りやイベントによって地域を盛り上げる現代の動きと通じるものがありますね。

軍艦祭と地域

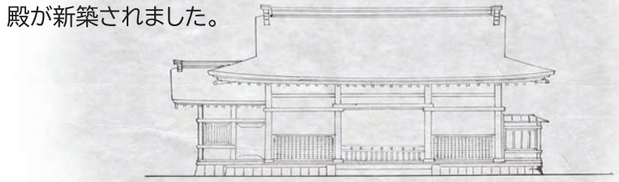


▸〔領収証〕（大正 15 年 9 月 9 日）
知事の宿泊料や土俵造りという内容のものが含まれており、規模の大きな祭だったとわかります。

海軍も拝殿新築に関与

昭和 11 年 5 月 23 日の夜、由良地域を猛烈な雷雨が襲い、その被害は由良神社にも及びました。雷が拝殿近くの松の木に落ちたため、拝殿が全焼してしまいます。すぐに消火活動が行われたため、本殿への延焼には至りませんでしたが、境内改築が行われることになり、その総工費は2万3千円にものぼり、地鎮祭や竣工奉告祭の様子は大阪 毎日新聞（京都版）などにも掲載されました。

改築には氏子から多額の寄付金が納められました。また、軍艦由良など軍部関係者からの激励もあり、翌 12 年には拝殿が新築されました。



▲「郷社由良神社本殿拝殿新築設計図」より拝殿正面の図

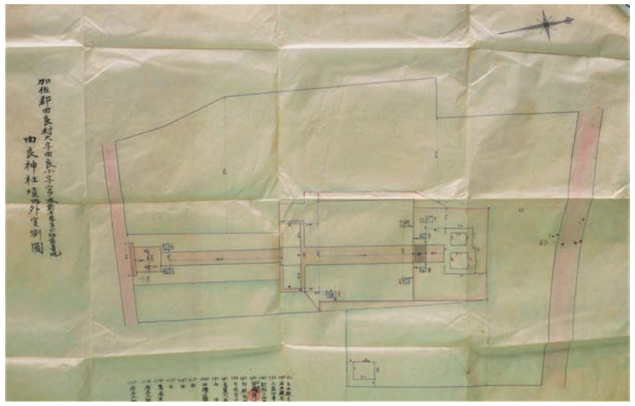
近代の由良神社と改築の歴史
―建築史学からの視点

この調査で、多くの建築図面が見つかりました。今回は、大正から昭和期にかけての遷座（神様を他の場所に移すこと）や改築・新築について、図面を参照しながら紹介します！

昔は山向きだった神殿

大正 6 年、神殿（本殿）が山側向きから現在の海向きへ遷座され、あわせて拝殿などが新築されました。

当時の境内図からは、2 棟あった本殿が移転した様子が読み取れます。また姿図からは、多種多様な拝殿の新築案が考えられていたことが分かります。



▲遷座前の由良神社の図面